

「そらうらや」

作 サカイリユリカ

【登場人物】

貴子（たかこ） 終演後に劇場に残っている女性。
マユミ 貴子の会社の同僚。

劇団ゆめみどり

大山（おおやま） 劇団ゆめみどり主宰。劇作、演出家。
田辺（たなべ） 主役を務める中堅女優。役A。
上元（かみもと） まだ若い二枚目男優。役B。
木幡（きはた） ベテラン男優。役C。
今泉（いまいずみ） 制作チーフ。
佐々井（ささい） 制作スタッフ。

観客役、キャスト役のエキストラ他。

【プロローグ】

——客入れ中、舞台上では既に何か芝居が行われている。（どんな芝居でも可。しかし、後半部分に上手く繋がるようにすると、なるべくファンタジック的要素が強いものが好ましい）

客席部分には客役の役者が座っている。（前2列くらいまで）

舞台上には明かりがついていて客電は落とされている。

開場した後、通常の客は、全員遅れ客扱いで案内されるのが望ましい。

——開演時間になる。

芝居（劇中劇）のクライマックス部分、始まる。

※これはつまり、開演時間までにだいたいこの流れになるようにこの芝居を上演する作り手側が客入れ中の芝居を上手く調整しておく。

舞台上、役者板付き。2人、向かい合っている。

役B（上元演じる）「そろそろ、あなたは元いた世界に帰らねばなりません・・・！」

役A（田辺演じる）「でも、私・・・」

役B 「あなたはこの世界の住人ではないのですから」

役A 「そんな・・・！ずっとここにいちやだめなの？」

役B 「あなたにはやるべきことがあるのです・・・！」

役A 「やるべきこと？」

役B 「さあ、この世界を牛耳ろうとしているあの悪いバクを倒して！！さすればこの世界は救われる！そしてこの地には平和が訪れ、あなたも元いた世界に」

役A 「わ、わ、分かった・・・！でも、どうやって倒せばいいんですか・・・？」

役B 「あなたの、強いハートからほとばしる想いがあれば大丈夫！さあさあ、みんな応援しています！頑張ってください！！」

役A 「よ、よし・・・！（何歩か歩く）って・・・やっぱり無茶ですって・・・（舞台袖にハケる、と同時に悲痛な叫び声）」

役B 「ご武運をお祈りしておりますー！！！」（舞台袖に走ってハケる）

間。

舞台袖から、役A（田辺）ふらふらしながら出てくる。

何歩か歩いて力尽きる。

客席前列の方から、C（木幡演じる）現れ舞台上のAに寄り添うよう座る。

何度かCがAを揺り動かすと、A、うなされたような声を出しながらゆっくりと目を開けて起き上がる。

役A 「ん・・・夢？」

役C 「何寝ぼけてんの」

C、Aの頬をつねる。

役A 「痛っ・・・」

役C 「起きた？」

役A 「うん、全部夢・・・だったんだ」

A、自分の頬をつねる。

暗転。

舞台面に照明がつき、役者が何人か出てくる。客席からは盛大な拍手。

役者たち、カーテンコールをする。

出演者代表 「本日はご来場いただき、(頭を下げ)誠にありがとうございました！」

全員 「(代表者に做って頭を下げ)ありがとうございました！」

再び客席から盛大な拍手。

役者ハケる。客電つく。

制作スタッフの今泉、客席の前で一礼をし、挨拶をする。

今泉 「本日は劇団ゆめみどり第6回公演『ファンタスティックアドベンチャー』にご

来場頂きまして誠にありがとうございます。今後の活動の参考とさせていただきます。

きますので、お手元のアンケートにご協力お願いいたします。

お氣をつけて、お帰り下さいませ。」

今泉、一礼して、ハケ際に扉前のカーテンと扉を開ける。そのまま扉付近で待機。

そのまま客出しを行う。

客席にいた客、何人かは去っていき、何人かはその場でアンケートを記入しだす。

やがて、アンケートを記入し終わった客もちらほら出ていく。

そんな中で、一人だけ席を立たない女性がいる。手元のアンケートはすでに記入しおわっているようだ――
少し経ってから、客の1人が忘れ物を取りに戻ってくるが、その女性は気にせずはまだ席に座っている――
劇場内（客席部分）にはその女性一人しかない。
今泉、腕時計を見つつ彼女に話しかけに行く。

今泉 「すみません…あの、役者との面会をご希望ですか？でしたらこちらではなく（ロビー）」

貴子 「いえ、」

今泉 「・・・どなたかお連れの方を待って」

貴子 「いえ、」

今泉 「では…団員の中に誰かお知り合いでも」

貴子 「いえ」

今泉 「あの・・・今日はこの後アフタートーク等もございませんし…」

貴子 「ええ、知ってます」

今泉 （腕時計をちらっと見て）「失礼します・・・申し訳ありませんが」

貴子 「（遮るように突然）すみません私…いつもこうなんです。」

今泉 「え？」

貴子 「芝居が終わった後ここを出て、駅の人混みの中にいつの間にか合流して、電車で人に揉まれて帰る・・・ほんと、一気に現実を引き戻されちゃうんですね。だから、一秒でも長くさっきまでの世界から抜けだしたくないというか・・・」

今泉 「・・・はあ」

貴子 「今余韻に浸っていたところなんです」

間。

今泉 「…あの、失礼ですがそろそろ・・・」

貴子 「ここ、」

今泉 「はい？」

貴子 「この劇場、22時まで開いていますよね？」

今泉 「ああ、はい・・・まあ・・・」

貴子 「私ロビーにしようと思います、ギリギリまで」

今泉 「・・・」。

貴子、席から立ち上がって去ろうとする。

貴子 (途中、立ち止まって振り返り)「あの、明日もまた観に来ますから」

今泉 「えっ？ああ、ありがとうございます」

貴子 (入り口付近で劇場をぐるりと見回し)「名残惜しいけど、じゃあ」

貴子、劇場から出て行く。(ハケる)

今泉 「…ありがとうございました」

今泉、少しの間その場に留まって女の去った方を見ているが、すぐに客席を見回り始める。
下手から花束を抱えた男性役者、出てくる。

上元 「お疲れ様ですーす」

今泉 「お疲れ様ですーあつ、なにそれ〜こんな大きいのもらっちゃって。どうせ明日ももらうんだろうから、家の中花畑になっちゃうわね」

上元 「いやいや、それはないですよ。たまたま貰ったんですって」

今泉 「いいじゃない、これから固定のファンつけば」

上元 「・・・まあ、それはそうなんですけど」

下手から制作スタッフ(佐々井)、出てくる。

佐々井 「お疲れ様です」

上元 「お疲れ様です」

今泉 「お疲れ様〜こっちはもうだいたい片付いたから」

佐々井 「ありがとうございます、わ、上元さんお花綺麗、」

上元 「あはは、本当は酒とかの方がうれしいですよ」

佐々井 「お酒ならこれから呑めるじゃないですか、今日は駅前の、」

今泉 「佐々井、表そろそろ片づけようか」

佐々井 「あ、ハイ」

今泉 「他の役者さんたちは、まだ客出し中？」

上元 「ああハイ、だと思えますけど・・・俺、あんま挨拶する人いなかったんで」

佐々井 「あ、今泉さん」

今泉 「ん？」

佐々井 「まだロビーにお客様いらっしやっただんですけど・・・女性1人だけだったんで・・・
受付あらかた片づけちゃいました。まずかったですかねえ・・・？」

今泉 「あー・・・そのお客さまって、もしかして」

佐々井 「・・・え？」

上元 「今泉さん、お知り合いですか？」

今泉 「いや、・・・何かさつき場内に最後まで残ってて・・・ロビーにいたるとか言ってたから」

上元 「なんでですかね」

今泉 「なんか言ってたけどよく分かんなかったなあ。あつ、その花束、その人からもらったんじゃないわ（よね）」

上元 「うーん、今日の俺のお客さんはもうみんな帰りましたし」

佐々井 「そうですか、でもまあ、（腕時計を見る）流星にその方ももうすぐ帰られると思いますよ。」

今泉 「よし、じゃあちやちやと残り片づけて、飲みに行きますかね！」

スタッフの2人、荷物を持って去ろうとする。

佐々井 「あ、上元さん・・・あの、今日劇場集合しないで直接飲み屋だそうですね」

上元 「え・・・？あ、そうなんだ・・・あの、・・・申し訳ないんですけど、俺ちよつと今日体調悪いんで帰ります」

佐々井 「えっ？」

今泉 「どうしたのー、なんか珍しいじゃない？しかも初日飲みだつてのに。せめて乾杯だけでも（一緒に）」

上元 「すいません、あと実はバイト先にもちよつと寄らなきゃなんで」

今泉 「え？なんかトラブル？」

上元 「そんなところです、皆さんによろしくです」

間。

佐々井 「・・・まあ、でも体調悪いなら仕方ないですよね」

今泉 「そうね・・・結構小屋入りしてからのスケジュールきつかったし、これからつとときに倒れても困るしね！じゃあ今日は、上元の方まで飲んできてあげるから」

上元 「はい、ぜひぜひ」

佐々井 「お大事にしてくださいね」

上元 「あ、ありがとうございます・・・じゃ、お疲れ様です」

上元、楽屋の方へと去る。スタッフの2人、荷物を持って去る。

——舞台上。道の向こう側からキャスト付きのアクリルガラス板を押しながら、手にケータイと花束を持った男（上元）、歩いてくる。
少し遅れて、反対側から女（マユミ）、ケータイを手にしたまま歩いてくる。
男、花束を床に投げ捨てる。

2人、同時にケータイを開きっぱなしのまま床へ置く——
と、引き寄せられるかのように、男性が運んできたアクリルガラス板越しにキスを始める。

何度も何度も、手はしっかりと板に添えて——

暗転。

【1場】

——昼間。どこかの会社近くの公園。気持ちが良い日差しと、芝生とベンチ。
OLらしき女性2人が連れだってやってくる。

貴子 「あぁー肩凝った・・・」

マユミ 「なんか今朝からずっとパソコンと睨めっこしてたもんねー」

貴子 「そう、ずっと同じデータの打ち込み。だんだん訳わかんなくなってるって
いうか」

マユミ 「あたしマジ無理、そういう単調な仕事？変化が欲しいわよねー眠くなるし。
ほら高速乗つてるときとかもさぁ、ずっと真っ直ぐな道なもんだから、あれ
相当飽きるわ」

貴子 「あぁ、あれだっけ？マユミ今やってるんでしょ、国盗り合戦？ケータイのGP
Sだけを使うんだっけ」

マユミ 「そうそう、暇つぶしになるかと思ってやってただけど、」

2人、ベンチに座る。

マユミ 「なんかいまいち達成感とかなくて？とっくに辞めた」

貴子 「早すぎ」

マユミ 「とりあえず流行にのっところと思っただけー」

貴子 「はぁ」

2人、お昼御飯を広げて食べ始める。

貴子 「あ、なに、今日お弁当？」

マユミ 「うん」

貴子 「今日はこれから雨かな・・・」

マユミ 「うっさい。昨日はぐつすり眠れたから早起きできたの。あーいい天気・・・
(伸びをして、ふとした拍子に空と目が合う) うわ、なんかあの空CGみたい」

貴子 「え？」

マユミ 「いや、なんかそう思ってたさ・・・ほら、あそこの雲の端っこのとことか・・・

あっち側の空の色とかさー」

貴子 「あー・・・まあ、言われてみれば・・・私のパソコンのデスクトップと似てるかも」

マユミ 「でしょ？あの微妙なグラデーション具合とかね」

貴子 「(目を細めて) うんやばいね・・・え、おもしろーい！」

マユミ 「ずっと見ていると変な感じしてこない？」

貴子 「する(笑う)」

マユミ 「(笑って携帯電話を取り出す) 写メっとこ」

貴子 「あ、いいねえ・・・」

貴子もケータイ電話を取り出して、2人、空の写真を撮る。

マユミ 「お、いい感じに撮れたわ〜」

貴子 「えー。見して・・・(マユミのケータイを手に取る)

あ、すごいすごい後で送ってー」

マユミ 「いいけどあんたも撮ったじゃない」

貴子 「上手く撮れないんだって・・・」

2人、お昼御飯を食べるのを再開する。

マユミ 「あ、そうそう、そーいや見たあの映画？」

貴子 「え、なんの映画？」

マユミ 「ほら、あの謎のエイリアンが攻めてくるやつ」

貴子 「あーあれね・・・まだ見てないわ」

マユミ 「今度見ると良いよ、すっごく面白かったから！なんかすごいのが、エイリアンC
G なんだけどすっげえリアルで。あの、なに？皮膚のね、感じとか・・・戦闘シ
ーンも見ごたえあったし！緑の液体がブシャー！みたいなの！」

貴子 「マジで？見てみたいなあ。最近さーすごいよね、こないだの恐竜の映画もリア
ルで迫力あったし」

マユミ 「ほんとほんと、3Dの迫力、ばないね」

貴子 「ティラノサウルスとか・・・」

マユミ 「あー、あの・・狩りのシーンとか生々しかったよね・・」
貴子 「あれはグロかったなー、」
マユミ 「見に行きなよ、エイリアンも」
貴子 「ああ、うん、いくいく」

間。

貴子 「・・・ねえマユミさ、今週どつか空いてない？」
マユミ 「え、なんで？映画？」
貴子 「いや、一緒に芝居観に行かない？昨日私が観に行くって言った、」
マユミ 「あー・・・今週、ね」
貴子 「なんか予定ある？会社帰りでも良いんだけど・・あ、まさか合コンとか・・？」
マユミ 「(唐突に) 私、カレシできたの」
貴子 「えっ？おめでとっ！良かったじゃない、どんな人？どこで・・」
マユミ 「(間髪入れずに) 彼とはいきつけのバーで出会ったの。長身で品の良いリーマンよ」

間。

貴子 「そう、・・・良かったじゃない。じゃ、彼との時間、大切にね」
マユミ 「ありがと、がんばる。で、貴子また今日も行くわけ？」
貴子 「え？」
マユミ 「ほら、昨日言ってた・・・お芝居？」
貴子 「ああ、もちろん今日も行くよ。明日も、土日はもちろんだし、」
マユミ 「へえ・・・よくそんなに投資できるねえ・・1回見ればいいじゃん」
貴子 「いやあ、昨日の劇団はずっと追いかけてるから。旗揚げの時からずっと。たぶん相性がいんだらうな、毎回面白くて。面白いと何回も見たいもんでしょ」
マユミ 「そういうもんか」
貴子 「うん。そういうもんだって。マユミも・・今日じゃなくていいから一緒に行かない？」
マユミ 「あー・・・うん、まあ考えとく」
貴子 「絶対観たらハマるから！もう、病みつきっていうか、中毒？楽しいし、泣けるし、役者さんの演技もすっごく良くて、なんかもう、あの空間が一体になる感じ？わくわくするよね、あれはね、また映画とは違う・・」
マユミ 「はいはい。昨日のはどんなやつなの？」

貴子 「うーん、ま、いわゆるファンタジー・・・？あ、でもなんか・・・ラストがちよつと・・・」

マユミのケータイが鳴る。

マユミ 「(ケータイの画面を確認し) あーカレシからだ。ごめ、またね！」

マユミ、急いで広げていた昼ご飯を片づけると会社の方へ走っていく。

貴子 「お熱いことで・・・。(空を見上げて) 確かに、そう言われてみると、あの雲とデスクトップの雲、おんなじだなあ。いやいやそんなわけではないじゃん。

あー。このままさぼっちゃおうかな〜(腕時計を見て) あ、今からならマチネ当日券間に合いそうだし！」

貴子、お昼ご飯を片づけるとケータイを取り出す。
ツイッターに投稿している様子。

貴子 「劇団ゆめみどりさんの芝居、すっごく面白かった」

「やっぱりいつも通り安心のクオリティ！」

「途中とか、あたし1人で号泣。でも途中のギャグとか腹筋崩壊」

「日曜日までやってるよ☆」

「普段芝居観に行かない人にもこれはオススメ！笑」

貴子、ケータイをしまう。

貴子 「(つぶやくように) でも、あのラストが納得いかない」

貴子、去る。

【2場】

貴子、電話している。

貴子 「(わざとか細い声を出し) もしもし。すみません、急に体調崩しちゃって・・・

たぶん軽めの風邪かなと思うんですけど、なんか熱っぽいし喉も痛いんで、

病院に念のため行つところかなって。来週から仕事忙しくなるじゃないですか、

だから今直しとかなないとすよね、はい、ありがとうございます、失礼します」

貴子、ケータイの電源を切る。そのまま劇場の客席に座る。

客席が、次第に埋まっていく。

舞台面に照明が付き、役者が何人か出てくる。客席からは盛大な拍手。

役者たち、カーテンコールをする。

出演者代表 「本日はご来場いただき、(頭を下げ) 誠にありがとうございました！」

全員 「(代表者に做って頭を下げ) ありがとうございます！」

再び客席から盛大な拍手。

役者ハケる。客電つく。

制作スタッフの佐々井、客席の前で一礼をし、挨拶をする。

佐々井 「本日は劇団ゆめみどり第6回公演『ファンタスティックアドベンチャー』にご来

場頂きまして誠にありがとうございます。今後の活動の参考とさせていただきます

ですので、お手元のアンケートにご協力お願いいたします。お氣をつけて、お帰り

下さいませ。」

佐々井、一礼して、ハケ際に扉前のカーテンと扉を開ける。そのまま扉付近で待機。

客出しを行う。客、1人、また1人とハケていく。

またもや席に座ったままの貴子。もちろん、場内に残っているのは貴子だけ――

佐々井、腕時計に目をやりながらどうしようか困っている様子。

貴子 「・・・・・・・・」

佐々井 「・・・・・・・・」

貴子 「(ふいに立ち上がった) あの、」
佐々井 「・・・はい」

貴子 「アンケートにも書かせていただいたんですが、・・・どうしても気になることがあります。あ、あの、どうして今回の作品、ああいうラストにしたんでしょうか。・・・あれってやっぱり夢オチってことですよ？なんか・・・夢を夢のまままで終わらせてほしかったというか・・・」

佐々井 「お客様、大変申し訳ございませんが、そういった質問にはお答え出来かねます・・・」
貴子 「あ・・・ご丁寧に、ありがとうございます。あの、ちよつと疑問に思っただけです。すから、単純に・・・。そうですね、突然聞いてしまっすすみませんでした。」

佐々井 「・・・いえ、こちらこそお力になれずに申し訳ありません」
貴子 「ありがとうございます。失礼します」

貴子、劇場を出ていく。

佐々井 「ありがとうございます。お氣をつけて、お帰り下さいませ」

今泉、場内に入ってくる。

今泉 「お疲れ様々」

佐々井 「お疲れ様です。・・・またいましたよ、あの人」

今泉 「ああ、さつきすれ違った・・・全ステ見る気かね」

佐々井 「さあ、でもありえますね。まあこちらとしてはうれしい限りですが」

今泉 「まあね。リピーター割とか設けたくなっちゃうよ」

佐々井 「ホントに。あ、なんかそれで、今回の芝居について聞かれたんですけど、あ、聞かれたっていうかちよつとクレームっぽかったかな・・・その、内容的なことに関してなんですけどね」

今泉 「それで、なんて対応したの」

佐々井 「いえ、私にはお答え出来かねますって言うておきました。まずかったですかね・・・？」

今泉 「うーん、まずくはないわ。妥当な判断よね。ていうかそういうのは、アフタートークとかで聞いてもらいたいなあ」

佐々井 「ですね、ちよつと明日ですしね」

今泉 「まあ明日来るか分かんないけど、」

佐々井 「私は来る方に賭けます、なんとなく・・・」

今泉 「なに、じゃあ来なかったらジュースでも奢ってくれる？」

佐々井 「えー・・いいですよ、」

2人、話しながら場内を出ていく。

——舞台上。ケータイを持った男女がキャスター付きアクリルガラス板を押しながら出てくる。

マユミは自室にて、ワンピースにズボンといったリラックスした部屋着。シュンも自室にて、ラフな格好でくつろぐ風。なお、シュンというのは上元拓也のHNである。

——二人はネット上で、チャットのやりとりを行っている。そのやりとりされている内容を淡々と声に出す。二人はあくまでアクリルガラス越しに会話したり、触れ合ったりする。(なお、チャットの内容は映像で映しても良い)

シュン 「こんばんは！また会ったね こんなに早くまた会えるなんて思わなかったよ
うれしい」

マユミ 「私もー良かったメッセ誘つといて」

シュン 「ありがとねー誘ってくれて」

マユミ 「うん だってほら、中途半端だったしね昼は ごめんねあたし、昼時間なくて
〜」

シュン 「なに、時間ないのに昼からエッチな気分になっちゃったの・・？」

マユミ 「え やだーそんなわけないから・・だってあんなことになると思わなかったし・・」

シュン 「期待してたんじゃないの〜？」

マユミ 「もお・・いいじゃん!!!」

シュン 「え、じゃあさ・・」

マユミ 「ん？」

シュン 「昼の続きしようか」

マユミ 「・・・うん」

シュン 「マユの近くに行くね」

マユミ 「あっ・・はい」

シュン 「くつつくの好き？」

マユミ 「好きだよ」

シュン 「なんか あったかいね」

マユミ 「ねー シュンの体温感じるよ」

シュン 「俺もそうだよ マユの息遣いも聞こえる」

マユミ 「顔、近くない・・？」

シュン 「そうかな、だって・・ そっと顔を近づけ、キスする」

マユミ 「ん・・」

シュン 「何度もキスを繰り返す。次第に、舌をいれたり深くなっていく やわらかいな、マユの唇は」

マユミ、自分の唇をゆつくりと指でなぞる。

マユミ 「シュンの首に手を回しながら ねえ、もうダメ・・・」

シュン 「ガマン、できないの？ 俺もだよ キスをしながら服のボタンを外す」

マユミ 「どうしよう 恥ずかしい 顔を真っ赤にしてうつむく」

シュン 「大丈夫 可愛いよ ねえ、下も脱ごうか 俺も今脱ぐから」

マユミ 「・・・うん」

マユミ、ケータイを持ってないほうの手でワンピースをまくって下から手を差し込む。服の中で胸を触っている。

シュン 「ほら 脱げた」

マユミ 「あ ふともも だめそこ弱いの」

シュン 「徐々に内側に手を滑らす 脚閉じないで ちよつとずつ、開いて」

マユミ 「こう かな」

マユミ、片手でズボンを中途半端におろし、下着を少しずらす。

シュン 「そう ゆつくり あ もう湿ってるね」

マユミ 「言わないで」

シュン 「ふふ マユの匂いがする どうしてほしいの」

マユミ 「え そんなの」

シュン 「こうかな 胸やわらかくて気持ちいいね」

マユミ 「頭 ぼーっとする」

シュン 「下 どんどんあふれてきてるよ」

マユミ 「ばか やめてよそんな」

シュン 「ごめんかわいくて じゃあ」

しだいに水音がします。マユミの脚にはいつの間にかズボンと下着が中途半端にからみついている。

シュン 「既にとろとろになっている場所に口づける ねえ聞こえる、音してるの」

マユミ 「ちよつと やばい そこ」

シュン 「ここがいいんだ」

マユミ 「そこ」

シュン 「もうほしいでしょ そろそろ」

マユミ 「恥ずかしそうに俯くが、力を抜いてシュンを待つ」

シュン 「いい」

マユミ 「きていいよ」

シュン 「いくよ」

マユミ 「あ」

シュン 「全部入ったみたいだ 腰を動かし始めて」

マユミ 「あ あ あ」

シュン 「もっとくっつくよう」

マユミ 「おかしくなっちゃいそう」

シュン 「すごく いいよ」

シュン 「マユの中、すごくあったかくて、はあ、マユ」

シュン 「すごくかわいいよ」

マユミ 「あ あ ア アア」

シュン 「いきそ？」

マユミ 「ん ちよつともうかなりヤバイ」

シュン 「正直俺ももう だつてすごくよくて あ」

シュン 「一緒にイこう」

マユミ 「うん、一緒に。一緒に・・・」

マユミ 「・・・」

マユミ、自分の膝の上に突っ伏す。ケータイが手から離れて少し転がる。

シュン 「・・・」

マユミ、ぼんやりとケータイをつかむ。

マユミ 「はあ すごく感じちゃった」

シュン 「マユの感じてる顔見たら 俺、超癒されちゃったよ」

マユミ 「えへへ ありがとう」

シュン 「じゃあ今日はこのまま一緒に寝ちやおっか」

マユミ 「うん、そだね」

シュン 「おやすみ」

マユミ 「おやすみ」

二人、同時にケータイの電源をオフする。暗転。

【3場】

貴子、電話している。

貴子 「もしもし。おはようございます。はい。そうです。いえ、風邪じゃなかったみたいですよ。

なんか、吐き気もするし食欲もないし、何かなって思ってまた行ったんですけど、病院。そしたらちよつと検査するからって血とられて、抗生物質処方されて、なんか怖いんですけど私も、でもとりあえずこれ飲んで安静にしときなさいって言われたんで。はい、ごめんなさい、よろしくお願いします。失礼します」

貴子、客席部分に座る。

次第が増えていく客席。

舞台上。劇団ゆめみどりのスタッフ控室。紙の束を持った佐々井。

佐々井 「お疲れ様です」

今泉 「お疲れ様、それ昨日の分？」

佐々井 「はい・・・、やっぱりちよつと少ないですよね」

今泉 「そうねえ、回収率悪いなあ」

佐々井 「前回のときより、減ってます？」

今泉 「ああ・・・減ってるかも」

佐々井 「鉛筆つけたんですけどねー」

今泉 「まあね・・・でもさ、ほら、実際あんまり書かなくない？自分が観に行ったときとかも」

佐々井 「確かに、あんまり書いたことないですね」

今泉 「みんなねー、なんだかんだで終わったらすぐ帰りたいしね」

佐々井、ノートパソコンを開く。

佐々井 「あ、みてください今泉さん」

今泉 「ん？」

佐々井 「ほら、これうちのHPなんですけど・・・意外にツイッターのここにはコメントが」

今泉 「あ・・ほんとだ」

佐々井 「結構、フオロワー数伸びてきてますし」

今泉 「意外とみんな見てるんだ」

佐々井 「今、結構どこもアカウント持ってますからねー」

今泉 「私そういうのからつきし弱いからなあ・・取り残されそうだな」

佐々井 「そんなことないですよ、」

佐々井 「みてください、このツイッター。Takakoっていうアカウントの人、うちの芝居

についてめちゃくちゃ眩きまくってるんですけれど・・」

今泉 「もしかしてあのひとかしら？」

佐々井 「まさか・・。あ、もうすぐ終演ですね」

2人、舞台袖にハケる。

制作スタッフの佐々井、客席の前に出てきて一礼をし、挨拶をする。

佐々井 「本日は劇団ゆめみどり第6回公演『ファンタスティックアドベンチャー』にご

来場頂きまして誠にありがとうございます。今後の活動の参考とさせていただきます

きますので、お手元のアンケートにご協力お願いいたします。本日はこの後1

0分間の休憩を挟みまして主宰の大山によるアフタートークを開催いたします。

お時間がございます方はぜひそのまま劇場内でお待ちください」

佐々井、一礼して、ハケ際に扉前のカーテンと扉を開ける。そのまま扉付近で待機。

客出しを行う。客、1人、また1人とハケていく。

制作スタッフ、机などを片づけ、舞台上にイスを用意。

舞台上には演出家の大山と司会者の今泉が向かい合うようにイスに座る。貴子、客席部分に座っている。

今泉 「えー、非常に面白い御話、ありがとうございました。それでは、そろそろ御客

様からの質問タイムということにしたいと思います。えー、何か聞きたいこと

があります方、どうぞ、お気軽に手を、」

貴子、おずおずと手を挙げる。

今泉 「あ、はい、じゃあそちらの方、どうぞ」

貴子 「あの・・作品の内容的な話になってしまってますけど、なぜラストが夢オチ

なんでしょうか？」

今泉 「・・・と、いうことですが、どうなんでしょうか？」

大山 「あ、はい、えーと・・・そうですね、まあ僕は作家と演出を兼ねてるわけなんですけども・・・僕はあくまでただのファンタジーにしたくなくて、なんていうか、現実世界があつた上でそういうものが産まれるんだぞってことを描きたかつたというかね・・・それとまあ、あとはちよつと方向性を変えてみようかなというか、挑戦？今までの作風とちよつと違ったことをね、今回はやってみようかと思ひましてね、まあここだけの話、本番3日前までラスト決まらなかつたんですけれどもね・・・(笑)」

演出家の独壇場。ロパクで喋り続ける大山。

大山 「・・・と、いうわけなんですがお分かりいただけましたでしょうか？」

貴子 「あ・・・はい、ありがとうございます」

今泉 「はい、それではもうお時間の方もきてしまったのでアフタートークはこれにて終了させていただきます。皆様最後まで残っていただきありがとうございます
た」

大山 「ありがとうございます。なお、皆さんもうご存知の方もいらつしやるかと思ひますが、今後劇団ゆめみどりは無期限に活動を停止することをここに発表します。活動再開は今のところ予定しておりません。あとは今夜の回と、明日の千秋楽を残すのみになりますので、ぜひとも多くの方に今回の作品を楽しんでいただけたらなと思ひっております」

客席から拍手。

大山と今泉、ハケる。

ハケていく客と共に、貴子、その場を後にする。

電話をする貴子。

貴子 「もしもし。はい、ええ、申し訳ありません。

あの・・・それなんですけど、実は私、今朝体、動かなくなつちやつたんですよ。金縛りっていうんですかね、全身硬直して、あ、別に幽霊とかは見えてないんですけど、とにかく体が動かなくなつちやつたんですね、どこも。

頭は起きてて、会社に電話しなきゃって、わかっではいるんです。当たり前です。だから必死に動かそうとするんですよ、でも全然無理で。それで・・・今、やつと解けました。はあ・・・そうですね、ちよつと疲れてるのかも・・・いいんですか、すみません、ありがとうございます」

——マユミの自室。

ケータイを持ったマユミとシュン、舞台の両端に、それぞれ上手側下手側を見て座っている。

二人、電話している。

マユミ 「もしもし・・・うん。今平気？え・・・？いや別に・・・ん、フツーにワンピースとイージーパンツみたいなのやっただけど？シュンは・・・？へえー、そっかあ。・・・え・・・？いや、やったことないよ。そりゃまあ・・・うん。・・・そう？えと・・・はい。（笑いながら）ちよつとお、なんか緊張してきたよー・・・
声、聞きたいの・・・？え、音・・・（笑って）音とか、
ヘンタイでしょシュンって絶対・・・（ケータイを股の近くへ持って行く）・・・聞こえる・・・？」

シュン 「俺さ、写メ見たいな・・・送ってくんない・・・？」

マユミ 「写メ？ああ、うん。まあいいけど・・・」

マユミ 「（ケータイを操作しながら）・・・前に撮ったやつでいつかなー・・・」

マユミ 「どこだっけ、あの写真・・・あ、あった！えーと・・・よし。」

シュン 「マユ、これ何の写真ー？空じゃん」

マユミ 「え・・・？（画面を確認し）あ、ごめんごめん！間違っただけで違う写真送っちゃった」

シュン 「つたくおつちよこちよいだなー、てかこの空って写メなの？」

マユミ 「え、そうだよ・・・？」

シュン 「いやなんかさー、すっげスクリーンセーバーっぽいついていうか・・・なんか絵みたいじゃない？」

マユミ 「ああ・・・（笑）そうかも、」

シュン 「・・・で・・・？」

間。

マユミ 「ごめんごめん、じゃあ、仕切りなおしで」

マユミ、寝そべってケータイを持った手を掲げる。

マユミ 「・・・どこ見たい・・・？」

マユミ、部屋を出ていく。シュン、舞台上からハケる。

【4場】

舞台上、思い思いにくつろいでいる役者たち。
立ち話をしている演出家の大山と田辺。

大山 「なんかさ、壊してみたくなっちゃったんだよね、」

田辺 「え？」

大山 「なんていうか・・自分の作った世界をさ」

田辺 「破壊ですか？」

大山 「そんな大げさなものじゃないよ、」

田辺 「そっか、まあ、夢オチですもんね」

大山 「ソフトでしょ？」

田辺 「ええ、まあ。本番直前に台本全部書き直すとか言われなくて良かったです」

大山 「ほんとはわかってるんだ、僕が何言っても説得力なんかないってことをさ」

田辺 「どういうことですか」

大山 「だって、そうじゃないの？みんな思い思い、思ってることあるでしょ。ボクの言葉がちゃんと届いてるかどうか不安なんだよ」

田辺 「じゃあ誰の言葉なら説得力があるっていうのよ。私はあなたを信じてやってきたんですよ、ここに捧げてきたんです、懸けてきたの。あなたがそんなだから劇団も続いていかないんじゃない？」

大山 「僕が本当に好きなのは、絶対に現実では起こらないような、きらびやかな夢の世界なんだ。そんな世界を生み出して、観客を虜にしたい。でもそれで本当にいいのか、観客が観たがっているものは実は違うものなんじゃないかって・・」

大山 「そういうわけじゃ」

田辺 「私だってわからないですよ、でも夢中で、」

木幡、話に加わってくる。

木幡 「田辺さんてさ、動画やってるよね・・？」

田辺 「え、なんで知ってるんですか」

木幡 「結構有名じゃない？地味に」

大山 「そんなことやってるんだ。え、動画って」

田辺 「やー、なんか恥ずかしいです。別に、生放送で動画配信して、喋ったりしてるだけですよ」

木幡 「楽しい？」

田辺 「楽しいですよ」

大山 「え、人気あるのそれは」

木幡 「再生数多いよね？今回の集客にも繋がってるんじゃない？」

大山 「ネットアイドル的な？」

田辺 「そんなんじゃないです」

木幡 「よく曝せるよね、あんだけ」

田辺 「え、だって役者だし」

木幡 「それとこれとは・・・」

田辺 「いやほら、あたし名前とかも・・・芸名じゃないんですよ、本名だし」

木幡 「ああ、」

田辺 「ネットだとリアルタイムに反応返ってきて、何かすがすがしいんですよ」

木幡 「すがすがしいの？」

田辺 「うん。だってフツーのお芝居だと、やっぱりお客さんみんな静かだし黙ってるじ

やないですか上演中って。や、まあ当たり前なんですけど、もちろん後で感想

聞けますよ？」

でもそれってほんとにリアルタイムに思った事じゃないし・・・ちよつと欲求不

満なんですよね」

木幡 「ああ、だから、ネット？」

田辺 「そうそう、別に大したことやってるわけじゃないんですけど・・・見てくれてる

人がいるっていうのをほんとリアルに感じるっていうかあ」

木幡 「コメントでね？」

田辺 「そうです」

木幡 「田辺さんてき、何のために役者やってんの？」

田辺 「え・・・？」

上元、
舞台の上に戻ってくる。

上元 「お疲れ様です」

田辺 「お疲れ様です」

木幡 「ついに終わっちゃうねえ。今日で」

上元 「そうっすねえ」

木幡 「上元君はさ、どーすんの？この後。ゆめみどり活動停止なわけだから、フリー
とかでやってくわけ？」

田辺 「上元さんだったら、他の劇団からもうオファー受けてたりして」

上元 「いやあ、もう、いいっすわ」

田辺 「え？」

上元

「俺は、もう役者とか、いいっす。ていうか演劇も、いいっす。気づいたんすよね。俺、別に演劇やってなくても、役者やってなくてもそれなりに楽しいし、生きていけんって」

木幡

「こんな若者に、引退宣言されちゃうとはなあ」

田辺

「上元さん、そんな中途半端な気持ちで芝居やってたんですか!？」

すごい剣幕で上元に詰め寄る田辺。

上元、その勢いに押されて一瞬ひるむ。

上元

「やるときはちゃんとやってるよ。仕事だし。まあ、カネもらえてねえけど。みんなで創り上げる世界、いいじゃない。楽しいし。達成感もあるし。でも、なんか違うんだよ。だって世の中、演劇だけじゃねえからさ、楽しいことって。こんな、カネも時間もとられて、でも稽古期間中はみんな集中して、チームで団結してさ。でも、また終わったらすぐ散りじりになって。

その繰り返し。もううんざりなんだよ、ぶっちゃけ」

田辺

「役者失格ですよ、それ・・・上元さんは・・・あたし、上元さんと共演出来て、嬉しかったのに・・・尊敬、してる役者さんだったから。」

上元

「ありがとう。でも俺、そんなたいそうな人間じゃねえし」

田辺

「(食い気味に) あたしは!」

上元

「なに?」

田辺

「あたしは、役者、辞めませんから。ずっと、舞台に立ち続けられる限り、あたしを求めてくれる人がいる限り、芝居を観たいと思ってるお客様がいる限り、やりつづけますから。」

だから、今日の芝居も、あなたに、全力でぶつかります。」

木幡

「・・・だってよ、上元くん?」

上元

「のぞむところだよ」

今まで黙っていた大山、口を開く。

大山

「さあみんな、もう開演一時間前だから、準備に入って。」

楽日だから、最後だから、よろしく願います。

スタッフの皆さんも、みんな。

(大声で) よろしく願います!」

一瞬の間。

その場にいるみんなから、まばらに、「よろしくお願いします」と返ってくる。それぞれ、本番の準備をしに、舞台上からハケる。

一方、貴子の部屋。貴子、床に座りこむとカバンからチラシの束を取り出す。

それを一枚一枚見ながら、見比べながら、興味があるものとそうでないものに選別して仕分けしていく・・・

床に広がっていくチラシ。

貴子 「家族のすれ違いを描く、ちよつぱりほろ苦い群像劇！

息つく暇もないドタバタハートフルラブコメディ！

至高の名作を現代版に演出を一新して上演！

激動の時代を駆け抜けた政治家の人生を描く社会派ドラマ！

言葉とは？身体とは？その境界を探る実験的前衛劇！

華やかなステージと華麗なダンス！音と光の競演！

海外の新進気鋭演出家、ついに日本招聘公演！

次世代を担う劇作家、渾身の書き下ろし新作！」

貴子、無言の作業を続ける――

【5場】

貴子、電話をかけている。

貴子 「もしもし。これってあれかもしれません、ていうかきつとあれです、ほら、1

人パートさんで、今休職中の人もいるじゃないですか。覚えてらっしゃいます？

部長は知ってますよね、あの人の休んでる理由。え、別に私はただそのパート

さんと個人的に仲が良かっただけなんで。私もその、そういう、精神的な事情

だと思っただけですよ。おそらく・・・。（言葉に詰まり）あ、ごめんなさい・・・。

なんか昨日から急に涙もろくなっちゃって。もう今何もする気起きないんです、

食欲もないし、え？あ、頭はずっと痛いんです・・・はい。ちよつとこわいです

けど、行こうと思います、そういう病院。はい、はい。わかりました。ご迷惑

おかけしてすみません。失礼します。」

マユミが貴子の傍に立つ。

マユミ 「あんた、演技向いてるんじゃないの」
貴子 「(電話を切って) マユミ」
マユミ 「まったく、こつちが何回連絡しても、電源切ってるし。
なに、何なの？これ何休暇？」
貴子 「マユミ、来てくれたんだ」
マユミ 「あんたがいきなり呼び出したからね、心配してきたに決まって・・・」
貴子 「いこ、もう始まるから」
マユミ 「ちよつと。あんたねえ、さっきみたいなこと言ってこれからいったいどうす」
貴子 「お願いマユミ黙って。終わったら話す。話そう」
マユミ 「ちよつと。じゃなくて。一回話そう。今。」

——カフェの光景。貴子とマユミ、向かい合って座っている。

貴子 「なんかさ、あたしはもうさー・・・芝居観に来るのでいいやって思ったわけ」
マユミ 「え」
貴子 「だってふつーに幸せなんでもん。仕事こなしで、お給料もらって、好きな芝居観に行つて。もうなんか、この生活が続けば満足かなー。」
マユミ 「(少し呆れたように) まあ、あんたの場合はねえ」
貴子 「マユミだって観たらハマるよ」
マユミ 「そうかな？まあハマったところであんたほど投資しないとは思うけど」
貴子 「はーいはい」
マユミ 「・・・」
貴子 「まあ、いいやなんでもない。気にしないで。それよか、最近できたカレシとお幸せにねー」
マユミ 「・・・」
貴子 「え？なに、どうしたの」
マユミ 「・・・あのね、それ、ウソ」
貴子 「——え？」
マユミ 「だから、恋人が出来たっていうの、ウソ」
貴子 「ああ・・・え、どうしてウソ、つくの」
マユミ 「え？」
貴子 「ウソ、どうしてついたの」
マユミ 「何よ、急に・・・」
貴子 「だって・・・なんでそんなことで・・・」
マユミ 「(ため息をつき)・・・あたしと貴子の間ではそれがホントになるから」

貴子 「……」

マユミ 「あなたが疑わずにいてくれれば、彼はあたしたちの中で成立するの。姿をあらわすの。私がウソをつき続けることでどんどん彼は出来あがっていくわけ・・・なんてね」

貴子 「そしたら、どうなるの？」

マユミ 「そしたら・・・きつと、壊せないものになるわ」

貴子 「……」

マユミ 「はは、ごめんごめん何かつい口が滑ったっていうかさ、ちよつとウソついてみちゃっただけ。あ、でもカレシは出来てないけどちよつとした出会いが会ったのはホントだよ」

貴子 「そうなの？」

マユミ 「うん、まあなんていうか・・チャットなんだけどね」

貴子 「ああ、チャット・・前にも言っただけ？」

マユミ 「ああうん、そうそう。でも最近出会った人とはねー、ヤっちゃったんだよねー」

貴子 「——は？」

マユミ 「え、だからチャットで」

貴子 「いや分かるけど」

マユミ 「あーなんか、きつとそれが最近のあたしのつかの間の幸せなのかも。

とりあえずさあ、本当にやるなんてめんどーじゃん。出会い系って便利だけど、実際に会うなんてリスク大きすぎるし。普通に怖いしね！・・でも、さみしいし。だから、チャットでいいじゃん？

リアルタイムで返事返ってくるし。安全だし。だいたいさ、妊娠の心配とかしなくて良いんだよ？

あとは何んだろ、そう、例えばどんなにムチで叩かれちゃったりしても痛くないわけ」

貴子 「……そう、だね」

マユミ 「暇つぶしみたいなもんだけどね」

貴子 「私にはよく分からないな」

マユミ 「そう？あなたの観劇趣味も似たようなもんじゃないの、ギジタイケンっていうかさそういう」

貴子 「疑似じゃなくて、私は体験してるつもりなんだけど」

マユミ 「ああそう、・・あのね、さっき言った人」

貴子 「え、チャットでやっちゃった人？」

マユミ 「そう。その人とき、またチャットでしゃべってたら、電話しませんかって言われたのね」

貴子 「それって・・・」

マユミ 「うん、まあそういうことなんだけど。あたしもまあヒマだったし、番号教えたんだ」

貴子 「うん、」

マユミ 「できー、電話、かかってくるじゃん。まあ、そんないきなりそういう方向にいかないわけ、で、最初は普通にどうでもいい世間話ってか、当たり障りのないこと喋ったんだけど・・・まあ、そんな会話長く続かないじゃない。で、いざそういう雰囲気になってやってみようとしたら・・・なんか全然違うの。チャットでやってるとときと、全然・・・ガラにもないんだけど怖くなっちゃって。私の中に声が侵入してくる感じ・・・。なんか、突然冷静になっちゃったのね。そしたら相手もキモいし、自分も何やってんだろって、冷めちやって——」

貴子 「切ったの、電話」

マユミ 「うん」

貴子 「大丈夫だった・・・？」

マユミ 「え、うん。次にチャットで会ったら気まずそうだけど」

貴子 「また、やるの？」

マユミ 「・・・やっちゃうと思うよヒマだから。そのうち電話することにも慣れるのかもね」

貴子 「・・・」

マユミ 「ごめん。ひいた？」

貴子 「・・・うん」

間。

貴子 「やっぱり、ウソつくならつきとおして欲しかった」

マユミ 「え？」

貴子 「マユミの話」

マユミ 「ああ・・・え、あ、っごめん」

貴子 「なんで謝るの、」

マユミ 「・・・」

間。

マユミ 「・・・無理だよ、無理だったよきつと。結局いつかバレるし、ボロ出るもんウソ
どんなについたところで。違う・・・？」

貴子 「・・・でもね、・・・」

マユミ 「早いか遅いかの問題でしょ、バレるのが」
貴子 「だから、最初から嘘なんて・・・」

間。

マユミ 「でもま、いつまで続くかって感じだけだね」

貴子 「・・・」

マユミ 「いいのよ別に。相手なんて腐るほどいるんだから、別の人見つければ・・・」

貴子 「ほどほどにしてね」

マユミ 「はいはい、アンタもね」

貴子 「なんで・・・私？」

マユミ 「芝居だって。あんた意外と色々見たいとか言ってるふらふらしてるでしょ」

貴子 「それとあんたのとは別問題でしょ」

マユミ 「別問題？同じでしょ！？」

貴子 「・・・だって、」

マユミ 「貴子さ・・・今日楽日だよ？明日から、どうするの？」

貴子 「え？」

マユミ 「今日の芝居が終わったらさあ、またいつも通り別の劇団とか見つけて、それ見に行くんですよ？今度は」

貴子 「・・・」

マユミ 「例えば好きな役者さんが舞台上で見れなくなっても、また新しい人好きになればいいもんね？ハマってた劇団の芝居に飽きたら、もっと面白いやつ探せばいいもんねえ・・・？」

貴子 「なんでそんなこと・・・！」

マユミ 「あたしたち、常にね、よだれをながしっぱなしなのよ

見たい見たい、楽しみたい、楽しみたい、どっか行きたい、もっと欲しい、ほしい、ホシイ、・・・

頭がバカになってんのよ。欲望が渦巻きすぎて、口の中乾き切ってるのに無理やり唾液分泌させられてる感じ。

ねえ、貴子、わかる？この感じ・・・

あんたも同じじゃないの、お芝居みたいみたいって、ここじゃない世界にいきたいいきたいってそうじゃないの？ねえあんたも結局あたしと同じでしょ？同じなのよ、認めてないだけで」

貴子

「それは・・・、」

マユミ 「食べるのもさ、娯楽じゃん？」

貴子 「なに、こういうコンセプトレストランとか？料理にまで世界観作りこんであつて、みたいな」

マユミ 「そうそう。内装とか、徹底されてる感じも。」

別世界の気分味わえて、お腹も膨れるんだから最高よね」

貴子 「ん、まあ・・・」

マユミ 「仮病使つてまで・・・ったく、失礼だよほんとにそういう病気の人にさ。」

明日から仕事、どうすんのよ？」

貴子 「・・・」

貴子、黙ってしまう。間。

マユミ 「(腕時計をちらりと見て) ねえ、もう時間なんじゃない？」

貴子 「・・・」

マユミ 「もう行かないとき、開演時間にあわないよ」

貴子 「ほんとに行くの・・・？別に、マユミ帰っても大丈夫だよ」

マユミ 「え、なにそれ・・・？何でいまさらそんなこと」

貴子 「だって・・・」

マユミ 「いいから行くよ」

——無言で店を出ていく2人。

【エピローグ】

——劇場。既にプロローグ冒頭のように芝居は始まっている。貴子とマユミ、制作スタッフに遅れ客として席に案内されて入ってくる。席に着く貴子とマユミ。制作スタッフ、劇場を出ていく。

貴子、しばらく目の前の芝居を観ているが、終演に近づくに向かって、そわそわしだす。突如、懐からテレビのリモコンを取り出し、

舞台に向かって、リモコンを向け、必死に「切」ボタンを押し続ける貴子。

貴子 「いや！終わらない、見たくない、終わってよ、変わってよ、

あたしの見たいものを見せてよ・・・！！」

貴子、現在芝居が行われている劇場の非常口に向かって走り出す。
舞台上では何事もないように芝居が続けられている――

プロローグ冒頭のシーンと同じように、芝居（劇中劇）のクライマックス部分、始まる。
※これはつまり、このときまでにだいたいこの流れになるようにこの芝居を上演する作り手側が客入れ中の芝居を上手く調整しておく。

舞台上、役者板付き。2人、向かい合っている。

役B（上元演じる）「そろそろ、あなたは元いた世界に帰らねばなりません・・・！」

役A（田辺演じる）「でも、私・・・」

役B 「あなたはこの世界の住人ではないのですから」

役A 「そんな・・・！ずっとここにいちやだめなの？」

役B 「あなたにはやるべきことがあるのです・・・！」

役A 「やるべきこと？」

役B 「さあ、この世界を牛耳ろうとしているあの悪いバクを倒して！！さすればこの世界は救われる！そしてこの地には平和が訪れ、あなたも元いた世界に」

役A 「わ、わ、分かった・・・！でも、どうやって倒せばいいんですか・・・？」

役B 「あなたの、強いハートからほとばしる想いがあれば大丈夫！さあさあ、みんな応援しています！頑張ってください！！！」

役A 「よ、よし・・・！（何歩か歩く）って・・・やっぱり無茶ですって・・・（舞台袖にハケる、と同時に悲痛な叫び声）」

役B 「ご武運をお祈りしておりますー！！！」（舞台袖に走ってハケる）

舞台袖から、Aではなく、貴子がふらふらしながら出てくる。

何歩か歩いて力尽きる。

客席から、マユミ現れ舞台上の貴子に寄り添うよう座る。

何度かマユミが貴子を揺り動かすと、貴子、うなされたような声を出すが昏々と眠り続けている。マユミ、その場に貴子を静かに横たえると静かに去っていく。

貴子は空っぽの劇場にいる――。

貴子 「どうして誰も起こしてくれなかったの？マユミ？」

貴子にスポットライトが当たる・・・。

貴子

「嘘つきは泥棒の始まり。

とつくに・・・とつくにだよ。

とつくにどうにかなりそう。

でも、いや、だから、あたしはここで、今、ここにいるの。

あたしの時間なんだからどう使おうがあたしの勝手じゃない！！

楽しくないわけがない。面白くないわけがない。

プラスにならないわけがない。アガんないわけがない。

そうだよ、だっていつだってここにいるとき、あたしは、

一番、楽しくて・・・楽しかった・・・。

そう、「一人で楽しめる、し、ね、

寝ててもばれない、し、ね、

ほんとのことはわからない、し、ね、」

貴子、舞台上を彷徨い、そこにある空間を味わおうとする。

貴子

「家に帰りたくなかった。ただ、歩いていたかった。

舞台を見終わつた後の時間、を味わい尽くすために。

どのくらい、どこをどこまで歩いたのかわからないけれど、

なんだかもう、朝焼けが見える・・・。

朝、きちやうのかな。

オレンジと赤を混ぜたみたいなのこの色は、初めて見た空のような気がした・・・

目の前に立ち並ぶ、ビル、走り去る車、商店街のアーケード・・・。

まるで薄い膜を一枚かけたみたいで、握りこぶしで強く叩いたら、

ディスプレイが割れるみたいに、目の前の景色も粉々になってしまっそうだ。

そしてその景色の破片を拾い集めて、ジグソーパズルみたいに、はめ直していくのだ。」

貴子、思いっきり拳を振り上げて、目の前にガラスでもあるかのように叩き割ろうとする。

・・・が、もちろんそこには何もないので、拳は空をかき、反動で体勢を崩す。

貴子、思わず体の力が抜けてその場に座り込む。

貴子

「明日、またくるね」

暗転。

ゆっくりと舞台面に照明がつき、客席から盛大な拍手。
終演――